

フルートとその指導法の歴史 (2)

— 『アルテス・フルート奏法 第1巻』(植村泰一訳) の考察③ —

昭和音楽大学教授 黒田 隆

はじめに

平成 21～22 年度の共同研究報告書『短期大学における実技教育の目的と手法についての研究』において、筆者はフルートの歴史を探り、それぞれの時代の楽器のために書かれた教本や理論書を取りあげた。そして「多鍵式フルート」から「ベーム式フルート」への時代の変わり目に書かれたアンリ・アルテス Henri Altes (1826～1895)の『アルテス・フルート奏法 Methode 1er partie』に焦点をあてて考察し、特にフルート奏法の基礎とされる第 7 課までを扱った。今回は次の段階である第 8 課以降を扱う。

演奏法について

第 8 課 C-dur の音階とアルペジオ

ここから第 14 課までは、音階（スケール）とアルペジオの課題が続く。またその間各課の冒頭に運指表を示しながら、3 オクターブの音域を序々に上に広げている。この第 8 課では No. 6 と No. 7 で D (3av)、E (3av)が課せられている(譜例 1)。No. 1 は 4 分 4 拍子 Allegro 全音符、2 分音符と 4 分音符、タイを組み合わせた C-dur の音階。No. 2 は C-D、E-D、E-C 等が、4 分音符と 8 分音符で組み合わせられている。これはつまりクロス・フィンガーの練習である。C-dur の場合、特に 2 オクターブの C-D-E の動きで大きく指が入れ替わる。その意味でこの基礎練習は効果的な練習であるといえる。No. 3 は 4 分音符と 8 分音符、No. 4 は 8 分音符、No. 5 は 4 分音符による 3 度進行のそれぞれ C-dur の音階である。また No. 8 Allegro 旋律練習は、美しいメロディーの二重奏になっている。

第 9 課の前に、理論に関する以下の章が挿入されている。

第十章「音程とその基本名称、全音階と半音階、音程の転回、音程のいろいろな性質、全音階的半音と半音階的半音、全ての音程の転回、単音程と複音程」

これは、第 1 巻冒頭の音楽知識(楽典)の内容を持つ、第一章から第九章に続くものである。

第十一章「全音階の構成、調、調号の位置」

アルテスはこの 2 つの章でかなりのページを割いて詳細に説明している。おそらく以下第 9 課から第 14 課までの、調性の発展に対応するものであろう。ただ冒頭同様ここでも各章の項目のみを掲載し内容に触れることは割愛する。

【譜例 1】 第 8 課 No. 6、No. 7 ¹



第 9 課 G-dur の音階とアルペジオ

ここでは Fis (1av, 2av, 3av)、G (3av)、A (3av)が運指表で示されている。No. 1 から No. 7 までスケールのパターンとしては第 8 課と変わりはないが、3 オクターブの E-Fis-G の動きは発音の面で学習者を悩ませると思われる。さらに No. 4 の 3 度進行においては A (3av) が登場する。柔軟なアンブシュールの対応、安定した息の流れの把握が求められる。その意味で No. 8 の G (1av)を基準とした跳躍の練習は効果的な基礎練習といえることができる。No. 9 の旋律練習 Allegro は 4 分 2 拍子、軽快な舞曲風の二重奏である。

第 10 課 D-dur の音階とアルペジオ

ここでは Cis (1av, 2av, 3av)が運指表で示されているが、まず発音の面で注意すべき課題は、No. 5、No. 6、No. 7 の Fis(3av)までの上向であろう。特に E (3av)-Fis (3av)の進行はフルートにとって発音のコントロールがかなり難しくなるため、第 9 課の問題点を克服しておく必要がある。運指面での注意点は Cis (2av)-D (2av)の動きである。これも全ての指が入れ替わるクロスフィンガーであり、さらに Cis (2av)ではフルートのキーが全開となり、楽器の支えが不安定になりやすく、音色、音程にも悪影響が出る可能性が高い。したがって、これについても Cis (2av)-D (2av)の運指の基礎練習が不可欠であるといえる。No.9 の旋律練習 Allegro 4 分 3 拍子は、A (3av)までを用いた高音中心の二重奏である。

第 11 課 F-dur の音階とアルペジオ

ここでは B (1av,2av) F (3av)が運指表で示されているが、この第 11 課については特に大きな問題は見当たらない。No. 4、No. 5、No. 6、No. 7、No. 8 で最高音が G (3av)または A (3av)となっているが、その前の経過音の中の音が F (3av)の場合と Fis (3av)場合では、そ

¹ 植村泰一 訳・解説：アルテス・フルート奏法 第一巻、シンフォニア、1978 年。 p.85

の難易度は大きく変わってくる。F (3av)の場合にはそれほど大きな問題ははらんでいない。また B (1av, 2av) の運指についても楽器の支えは安定していて音色、音程への影響も出にくく、スムーズに進める課と考えられる。No. 9 の旋律練習 Allegro 8 分 6 拍子は、高音中心の旋律的な動きとリズムミッな動きが対比されている。

第 12 課 B-dur の音階とアルペジオ

ここでは Es (2av, 3av) B (3av)が運指表で示されているが、これまでの最高音 B (3av)が登場する。ただこの音については、さほどアンブシュールを意識しなくても、比較的楽に発音できる。またこの B-dur の場合、B (2av) C (3av) D (3av) E (3av) F (3av) G (3av) A (3av) B (3av)の音の並びはあまり無理せずに対応できる。むしろ運指に注意を払うべきである。Es の音は 1av、2av、3av でそれぞれ指が異なる。特に 2av の左手の人差し指は必ず開ける必要があり、この時期にきちんとこの運指を身につけないと、将来的に問題を抱えてしまうことになりかねない。No. 1、No. 5、No. 6 のスケールはもちろんのこと、No. 4 の 3 度進行も注意深く練習する必要がある。

第 13 課 A-dur の音階とアルペジオ

ここでは Gis (1av, 2av, 3av)が運指表で示されている。この Gis、特に 3 オクターブは Fis と並んで、大変発音しにくい音とすることができる。No.3 の 3 度進行はこれに対応するために効果的な練習方法である。この課において 3 オクターブの Fis、Gis を無理なく発音することができるようになれば、この先はスムーズに進歩することができるであろう。また運指の面からも、この 3 オクターブの Gis は注意を払わねばならない。左手の親指と人差し指を開けるため、支えが不安定になる。2. 3 オクターブの Cis の場合も同様であるが、左手の手首をやや内側に入れるなどの工夫が必要になるかもしれない。前半の「フルートの持ち方」(訳者解説、写真)が大いに参考になると思う。いずれにせよ、この第 13 課はいろいろな面でキーポイントになる課とすることができる。No.6 旋律練習 Allegro 4 分 3 拍子はメヌエット風のテーマが 2 回変奏され、コーダをへて終曲するという、ややスケールの大きい曲に仕上げられている。

第 14 課 Es-dur の音階とアルペジオ

ここの運指表では Es (1av)のみが示されているだけである(譜例 2)。Es-dur の場合、B-dur でも述べたが、それぞれの音域によって異なる Es の指を確実に把握することが重要である。発音の面では特に出しにくい音はなく、比較的対応しやすい調性である。学習者には技術的に吹きやすい分、No. 7 旋律練習 Andantino 8 分 9 拍子を、音楽的に美しく仕上げることに情熱を傾けてほしい。カンツォネッタと題され叙情性豊かなテーマの第 1 部と軽やかな変奏の第 2 部から出来ていて、アーティキュレーションも施され、このアルテス・フルート奏法 第 1 巻の仕上げとも言える楽曲である。

【譜例 2】 第 14 課 No. 1~No. 3 ²

第 8 課から第 14 課まではほぼ次のパターンでスケールが課せられている。

Es-dur の音階とアルペジオ

低音の Es の選指

左手

人差指 ●

親指 ●

中指 ●

薬指 ●

小指 ●

右手

人差指 ●

中指 ●

薬指 ●

小指 ●

Es キー ●

Cis キー ●

C キー ●

No. 1

No. 2

No. 3

² 植村泰一 訳・解説：前掲書。 p.114

【譜例 3】 第 14 課 No. 4~No. 7 ³

No. 4

3度の音階 (第十章 § 3 参照)

No. 5

9

No. 6

No. 7

³ 植村泰一 訳・解説：前掲書。p.115。

第 15 課 C と A の半音階の練習

表題の通り C と A から始まる半音階が 4 分音符、8 分音符、タンギング、スラー、音域を変えて No.1 から No. 8 まで並べられている。

次にはこれまでの第 1 巻の各章の内容をさらに発展させ、第 2 巻への導入の要素を持たせた第十二章が置かれている。

第十二章「調、音階の各音の名称、関係調、異名同音、エンハーモニック転換」

ここでは **dur** と **moll** についての具体的な説明、異名同音から **Cis-dur** と **Des-dur** の関係等、調性についての内容を発展させている。そして「音組織を構成するすべての長短音階の表」として全 24 調が表示されている。ここまでの課題ではシャープ、フラットがそれぞれ 3 つまでの調性、しかも **dur** のみが課せられていた。調性の理論を説明した後とはいえ、ここで長短全 24 調が示されるのはフルートの学習者のための教本としてはやや飛躍しすぎているように思われる。

運指表

巻末にフルートの全音域にわたる基本運指表が記載されている。この運指表も今までの内容の進み方から考えると、やや飛躍しすぎているようにも思われる。高音域は一気に最高音域まで広げられ、いくつかの替え指も表記されている。

またさらに「**♯**のついたすべての長調のスケール、アルペジオ、および **A** と **C** の半音階」「**♭**のついたすべての長調のスケール、アルペジオ、および **A** と **C** の半音階」を表示し、[スケールの練習は非常に大切である。楽器の機能に一日も早くなじむためには、スケールの練習を「毎日の練習」として必ず行なわなければならない。このスケールの練習が充分できてから第二巻に進むべきであろう。]と結んでいる。

訳者は第十二章の終りに解説として、「音階について」の詳しい説明を付け加えている。ピタゴラス音階、純正調、平均律、ミーントーン音階などのそれぞれの音階の特徴を説明している。そして純正調、平均律の長所、短所を見極めることから、フルートの音程に対する工夫の方法を詳しく述べている。

また訳者は「フルートの全音域にわたる基本運指表」では注として「替え指が示されるようになってからも基本はあくまでも正規の運指を用いることである。特に運指をやさしくするためだけの替え指は、第二巻を終えるまでは絶対に使ってはいけない。特に注意したいのは、**Fis** で右手の中指を使うこと、**B** で左手の親指でいわゆるブリチャルディーキーを使うこと、**E** 等の時に右手小指で **Es** キーを開けるのを省略すること、中温の **D** と **Es**、高音の **D** で左手の人差指を離すことを省略すること、この 4 つは絶対に避けるべきである。トリルの運指は別として、替え指はあくまでも音程と音色を変えるものであって、運指をやさしくするためのものではないことを知ってほしい。常に正確な運指で演奏するために、

疑問を感じたらすぐに運指表を調べることを望ましい。」と述べて第2巻へ進む学習者のための注意と心構えを示している。

まとめ

「実技教育の目的と手法」という共同研究テーマを継続させて、フルート学習者のための導入教則本『アルテス・フルート奏法 第1巻』を自分なりに考察してみた。1847年に初めて銀製のベーム式フルートが制作されて160年余り、この教本が書かれた当時に比べ楽器そのものも著しく変化している。

そのためこの教本の内容が、現在の指導にそぐわない個所も数多く存在することも感じた。しかしそうした部分では訳者が「訳者解説」「訳者注」などを挿入し、分かりやすく説明している。この教本出版以降、数えきれないほどの教本、練習曲等が作られているが、この考察をきっかけに、自分が学習した以外の多くの教本に目を向け、学習者のレベルに合わせた指導を実践していきたいと思う。

最後にこの出筆を快く許可して下さった植村泰一先生に感謝し、この考察を終えようと思う。